



女人高野・室生寺表門

銅板屋根でみごとに改修 甦えった女人高野・室生寺

密教美術の宝庫と言われる奈良・室生寺。八世紀末に建立された真言宗室生寺派の大本山であるこの寺は、また「女人高野」としても知られている。密教の本場高野山では厳しく女人を禁制したのに対し、室生寺では女人の出入りを許したのでこの名が付いたのだという。今でも参拝者の八割が女性である。

この地は、平安京の都からはるか遠くに位置したため、破壊焼失の難から逃れてきた。おかげで国宝五重塔をはじめ境内のほとんどの建物が創建当時の様子を今日に残している。

密教の名の通り、室生寺は、うつそうとした杉、檜の太木に囲まれ、実に厳かである。表門をくぐり、最も奥にある御影堂(納骨堂)まで、本坊、護摩堂、仁王門、弥勒堂、金堂、五重塔、奥の院とつく。この間、山道を三十分、石段を約七百二十段登ることになる。

国宝五重塔は、屋外に立つ五重塔としては、総高十六メートルとわが国最小のもの。勾配がゆるく、軒の出の深い檜皮葺きの屋根は、朱塗りの柱や白壁と心地よい対照をみせている。この美しい五重塔が、平成十年、台風による大木の倒壊により、大被害を受けたのである。

女人高野の威厳を保つ銅板屋根

平成十二年七月、みごとに五重塔は甦えった。修復工事がはじまって年十か月が過ぎていた。その後同寺内で老朽化の進んでいた檜皮葺き、コゲラ葺きの本坊、護摩堂、御影堂、仁王門前の展示館の屋根が銅板で葺き替えられ、現在鐘つき堂屋根が葺き替えられている最中である。

五重塔を含め、今回の大改修について同寺財務執事・松平雅之氏は言われる。

平成十年の台風の際、五重塔の上にあつた樹齢六百五十年、高さ五十メートル、直径二・四メートルの杉の大木が根元から折れ、五重塔に倒れかかりました。上層の屋根は、かなりひどく壊されましたが、

幸い中心にあつて塔を支えている芯木に被害がなかつたため、塔全体がバラバラになりませんでした。木にも心があつたと感じています。また、屋根の隅木が開いている構造のため、一種の耐震構造となり、被害が少なくつすんだようです。

その後、修復することになり、調査を進めたところ、使われている木材のなんと六十パーセントが創建時のものと判明しました。鎌倉、明和、明治、昭和時代の改修の際に、その時代の部材が部使われていますが、これには驚きました。屋根については厚板葺き、コゲラ葺き、檜皮葺きと変わってきたようです。改修に際して、二、三層部についてはジャッキアップし、部分的な改修を、また四、五層については解体の大修理を実施しました。国宝の改修に当っては、それまでと同じ材料を使わなければならないという決まりがあるので、檜皮葺きで葺き替えました。

その他の建物についても、だいたい傷んだ屋根があつたので、すべて銅板の本掛文字葺き(株ノタマハウジンクウエア)で葺き替えました。いろいろ屋根材を検討してみましたが、



松平執事

銅は軽く、緑青をふいたときの趣きは例えようがなく美しいものがあります。このように周囲を深い山で囲まれている場所では、厳かさを守り、しかも周囲と調和することが何よりです。銅板は葺き替え時の光沢のあるものから次第に緑青がふき、その移り変わりがまたよく周囲にマッチしているんです。森閑と静まり返る境内、二人の女性連れが五重塔を見上げ、手を合わせている。母娘だろうか。やはりここは女人高野だ。



台風により塔の屋根は大被害



美しく甦えった国宝五重塔



銅屋根への改修が進む鐘つき堂



銅屋根に改装された本坊